

現状と課題

2022年刑法犯の検挙人員に占める再犯者率は**47.9%**／再犯時無職者の割合が約**7割**

2013年2月「日本財団職親プロジェクト」発足
全国で477社の企業が登録済（R6.10.31現在）
実績：1,065人の受刑者を雇用（R6.10.31現在）

↓
〈見えてきた受刑者の社会復帰における課題〉

- ・ 就労意欲等の欠如
- ・ 社会復帰への準備不足

- 受刑者は、一般に**問題を起こすことなく受刑生活を送る**ことに注力
- 受刑生活で**自主的な行動が一定程度制約**され社会性やコミュニケーション能力が低下
- 刑事施設の日課の関係から**長時間の作業時間の確保が困難**

対策

「開放型刑務所」整備に向けた研究会

- ・ 2024年6月から9月 全6回
- ・ 松山刑務所大井造船作業場視察
- ・ ノルウェー王国:低セキュリティ刑務所、ハーフウェイハウス等視察

〈研究会メンバー（敬称略）〉

井村雅代 名執雅子 中井政嗣 林眞琴
廣瀬健二 森克司 矢野恵美

2025年6月 拘禁刑施行

受刑者個々の特性に応じた社会復帰プログラムを体系的に実施できる環境が整う。

提言

- **社会に近い環境**で自律的な生活を送り、円滑な社会復帰が可能となる**モデル施設の整備**
- **矯正と保護との緊密な連携**に基づく処遇の充実による**開放的な環境への段階的移行の実施**

受刑者が被害者への贖罪の気持ちを持ち、地域社会に貢献する人材となり、職を得て納税者のひとりとして社会復帰することは地域社会にとってメリットとなる。

「塀のない」刑務所 基本コンセプト

社会に開かれた



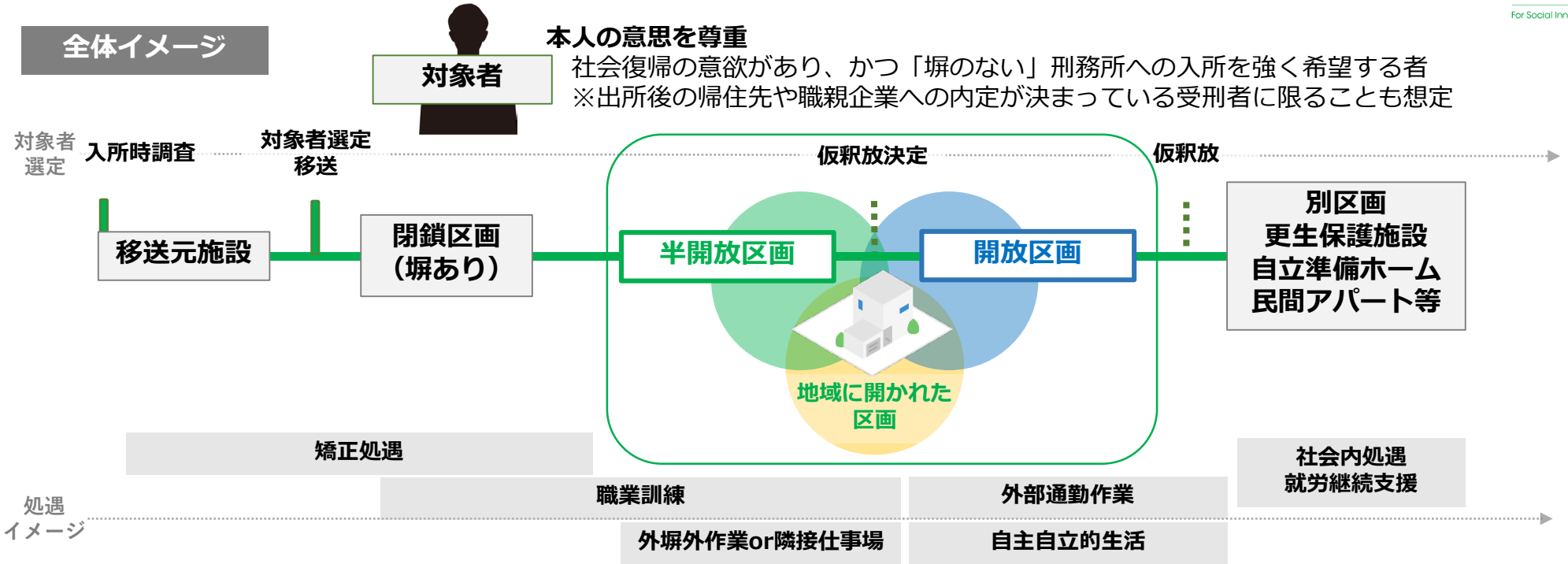
これまでにない
まったく新しい刑務所

都市型

チャレンジする

- **ハーフウェイハウス**（中間施設）の實質も併せ持つ「**社会に開かれた**」刑務所施設内処遇⇒社会内処遇⇒社会復帰へのソフトランディングを可能とする
 - 多種多様な外部リソースを活用できる「**都市型**」刑務所
職親企業をはじめとする地域の多種多様なサポーターから支援を得て社会復帰を促進
 - 拘禁刑時代の新たな矯正処遇等に取り組む「**チャレンジする**」刑務所
自発性及び自律性を涵養、自らの罪に向き合わせ贖罪意識を醸成
- 再犯率を下げ、偏見のない社会・多様性と包摂性のある持続的な社会づくりに繋げる

全体イメージ



◆具体的な処遇、運営等に対する提言◆

具体的な処遇内容

- 刑務作業
- 仕事フォーラム・職業体験
* 職親プロジェクトから継続実施。(対面/メタバース)
- 自己契約作業
* 職親企業等幅広い選択肢
- 基礎学力の習得
- 自己管理・金銭管理
- 被害者への感謝の気持ちの醸成
- 家族との良好な関係の維持及び再構築

建物の構造

- 単独室
- 一人暮らしを想定し、炊事、洗濯、掃除等が自分でできる環境
- 半開放的な空間⇒開放的な空間⇒地域に開く空間と段階を経るよう設計
- 自学用のオープンスペースや、自習室を設置
- カフェや店舗を併設
- 地域に配慮し地域に馴染むようなデザイン

社会内処遇との連携

- 自立準備ホームを併設又は既存の更生保護施設等と連携
 - 受刑者に対する教育的活動に出所者が任意で参加
- ・ 出所後の環境変化が急激なものにならないようにする
・ 施設内処遇と社会内処遇での切れ目のない継続的な処遇・支援
・ 社会復帰へのソフトランディングを実現

地域理解・地域との共生

- 職親プロジェクトの実績の上にあることを説明
 - 受刑者と地元住民・企業が関わる機会を積極的に用意(納涼祭、文化祭、餅つき、清掃)
- ・ 地域の不安払しょくのため、地元住民に様々な活動に参加頂く
・ 刑務所側が地域貢献に取り組む姿を地域に見せる